

備えるための端午の節供

漢齋英泉「十二月の内五月くす玉」



菖蒲あやメなすで
飾かざったくす玉は、
端午の節供に
柱はしらや簾すだれにかけて
邪気まじを祓はらった。
所蔵：国立国会図書館

多い時期において端午は特別な日とされたのです。

こうして得た「端午の生葉」のうち、最も重用されたのが菖蒲あやメです。ただ、ここでいう菖蒲は、華やかな花を咲かせるアヤメ科の花菖蒲や、杜若かきつばたとは異なる植物で、黄色い筒状の花をつけるサトイモ科の植物です。その葉は強い香りを放ち、尖った葉の形を剣に見立ててはさまざまに邪気を祓う力があると信じられていました。やがて、この魔除けの草は「菖蒲」の音読みとしての「尚武しょうぶ」に通じることから、

武家社会になると、端午の節供においての供物として使われ、男の子の祝いの日として定着したのです。

さて、端午の生葉・菖蒲は今でも菖蒲湯としてお風呂に使われますが、この時期特有の生葉は他にもあります。たとえば、「梅雨」に縁のある梅の実。梅干、梅酒、黒梅など、疲労回復、抗酸化作用などさまざまな効用が認められ、各地で多様な伝統食として受け継がれる、日本人の食文化になくてはならないものです。また、漢方で十薬といわれるほど多くの効能をもつドクダミは、体内の水分量や皮膚の汗腺の調節をし、老廃物を取り除くなど、夏に最大限にその力を発揮します。

端午。この日摘んだ葉草で人々は火の力を取り込み、穢けがれた水の力を祓い、次の季節に身体を備えるのです。まさに旬の力を知り得た上での賢い養生法といえるでしょう。

端午の節供は、今や男の子が元気に育つようにと、武者人形を飾り、鯉のぼりをあげて祝う日です。しかしながら、かつて端午は女性の成長を祝う日でした。旧暦5月は古名では皐月さつき。この月、早乙女と呼ばれる田植えをする少女たちが稲の穀霊を迎えるため、菰ももを敷き詰めた納屋に籠って身を清めます。また、早乙女以外の少女たちも衣食住に関わる作物などが実る力・技術を神からいただき、丈夫な子供が産めるように、とその成長を祈ったのです。

暦においての「端午」は「午うまの月の端はじめ」の午の日。旧暦5月は新暦では梅雨と重なります。「梅雨」は中国では「霪雨」と表記される程、湿度の高さや霪かひの発生が人々を悩ませましたが、梅雨は秋の収穫にとって大切な恵みでもありました。そこで、常日頃、季節を愛でる習慣をもつ日本人は、「梅の実が熟す」頃として「霪」と同じ音をもつ「梅」の文字を充て、「ばい」と呼び習わしてきました。季節を美しく捉える日本人は「霪」の文字を使うことを憚はばったのでしよう。

しかし、長雨は様々な湿病をもたらします。そこで中国の思想を取り入れてきた貴族社会では特にこの端午の正午に、薬効の高い生葉を求め、山へ分け入る「葉狩り」が行われました。五行思想では「午」の重なる日・時間は「火」の性質がより強くなると考えられ、水気の

いどりえこ／民俗情報工
学研究者。1964年、北
海道生まれ。多摩美術大
学非常勤講師。節供の会
「アエノコト・節供の饗応」
をはじめ、伝統儀礼や風習
の意味を民俗学的に解明
し今に具現化する提案を
行う。著書に『暦・しきた
りアエノコト』日本人が大
切にしたいうつくしい暮ら
し』など。